

食に対する選好と選択にみる食生活の豊かさについて：アマルティア・センのケイパビリティの一解釈にもとづく倫理的評価

著者	木谷 忍，長谷部 正，杉本 貴子
雑誌名	農業経済研究報告
巻	33
ページ	25-36
発行年	2002-07-17
URL	http://hdl.handle.net/10097/33423

食に対する選好と選択にみる食生活の豊かさについて —アマルティア・センのケイパビリティの —解釈にもとづく倫理的評価—

木谷 忍*・長谷部 正**・杉本 貴子***

目 次

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| 1. 研究の背景と目的 | 2) 調査の設計と実施 |
| 2. 生活の豊かさ（食生活の豊かさ）とは何か | 3) 調査の結果 |
| 1) ケイパビリティの定義 | 4. 食生活にみるケイパビリティの測定 |
| 2) 意思決定モデルと選択肢の数 | 1) 都市と農村でのケイパビリティの分布 |
| 3. 食生活に対する選好・選択と調査の実施 | 2) 被験者属性と食生活環境に対する選好・食の行動 |
| 1) 食生活に関する選択肢とその機能性 | 3) 地域性・食の知識とケイパビリティ |
| | 5. 結論と提言 |

1. 研究の背景と目的

戦後の日本人の食生活は、飽食といわれるように、食物に関する質・量だけではなく食品産業の台頭により食事形態も多様になり、日本は食の豊かさを享受しているようにも見える。実際、社会的状況に応じた様々な食の選択肢が各人に与えられ、自由な食の選択によって豊かな生活が達成されているように見える。十分な食事時間がなくファーストフードや加工食品などによる食の簡便化は、食の豊かさという点で問題であるとの指摘があるが、食の意味を滋養の確保のみに求めて食の簡便化を選択することが、食生活の豊かさを損なっていると結論づけるのは正しくない。食の簡便化を選択するのも個人の自由なのだから。

アグリビジネスの台頭により、群管理導入による農業の工業化、生産・加工・流通・販売など生産現場から食卓までの統合化、そして地域市場から世界市場へのグローバル化がもたらされ、自給自足的な伝統的食生活や食文化が解体される一方で、食の効率化が促進された。この効率化は農業（生産者）と食（消費者）、ひいては農村と都市との距離を拡大し、一部ではこのような情勢に対する危機の念がもたれるようになった。例えば、食農一致運動、公的機関による消費者と生産者の交流促進事業である。筆者が問題としたいのは、国家がこのような運動に関与することの正当性である。一つの考え方として公共経済学の枠組みを用いた正当化があろう。市場経済のグローバル化による食材の安全性の問題や、農業生産の群管理に伴う環境破壊など、消費者全員にもたらす損

* 東北大学大学院農学研究科環境経済学分野助教授

** 東北大学大学院農学研究科環境経済学分野教授

*** (株)森八大名閣

失（パレート非効率）を回避するという論理である。しかしこれは机上の空論である。というのは、これらの損失がアグリビジネスから得られる消費者の満足を上回るという根拠は何もないからである。さらに言えば、たとえこの公共経済学的正当化が正しく、かつ食材の安全性や環境破壊の問題が解決されたとしても、現在の日本の食生活に全く問題がなくなるとは筆者は考えていない。経済学的な観点だけで食と農のあり方を論じることが不適切と考えるから。

本研究では、食と農について倫理的な観点から人々の生き方の幅に着目し、その幅の大きさが食生活の豊かさであると規定する。さらに、その幅を測るべく一つの指標を提案し、都市住民と農村住民に対する調査を通して、都市部での食生活の豊かさが失われていることを実証的に示すことを目的とする。

2. 生活の豊かさ（食生活の豊かさ）とは何か

1) ケイパビリティの定義

現代の分配的正義論は、脱効用主義を基調とした平等主義的資源配分論であり、その論点は配分する資源の中味にある。現代正義論の元祖であるジョン・ロールズはそれを「社会的基本財」とし、実行可能な政治および社会システムの中から最も平等（マクシミン）に配分するように説いた。ここで、社会的基本財は各種自由、特権、自尊の社会的基盤、富などからなる。アマルティア・センはロールズの社会的基本財は物神崇拜であるとの批判を行なった後に、配分する財の機能に着目して配分されるべきであると述べている。また、機能の集合をケイパビリティという¹⁾。結果として、機能の集合を平等に配分することがセンの分配的正義である。川本 [1] はセンの述べるケイパビリティの内容から、機能を「生き方」、ケイパビリティを「生き方の幅」と訳しており²⁾、本論文でもこの見方に従う。当然ながら、ケイパビリティを測る尺度および機能集合の上の順序関係を定義することなしに、センの分配的正義は実行不能であるが、ここではケイパビリティの配分については考察しない。すなわち、生活の豊かさをケイパビリティの観点から測定することを念頭に、食生活の豊かさを比較するための尺度を構成する。

2) 意思決定モデルにおける選択肢の数

ケイパビリティが機能の集合であるなら、それは各個人の意思決定状況とその結果に対する各人の評価にもとづいて決定されよう。オートマタ理論における意思決定モデル $M = (Q, X; \delta, \sigma)$ は、状態集合 Q （環境）、選択肢の集合 X 、および次の二つの関数で構成される³⁾：

$$\delta : Q \times X \rightarrow Q \quad \sigma : Q \rightarrow R^+ \quad (R^+ : \text{評価空間})$$

このとき、選択肢の「数」（ X の大きさ）がケイパビリティを尺度化するときの一つの視点になる。なぜなら、各選択肢は何らかの各個人にとって何らかの機能に対応しており、その数が多ければ、機能の集合の「大きさ」に寄与することはあっても損なうことはないからである。そこで、選択肢の「数」としてのケイパビリティについて次の三つの観点から捉えてみよう。

①形式的な「数」

②可能性のある「数」

③意味のある「数」

形式的な「数」は、非支配的な選択肢だけに着目するのではなく、支配されうる選択肢をも含めた実行可能領域の大きさを意味する⁴⁾。これを支持する論理としては、リスクの存在（ δ の不確実性）が挙げられる。つまり、個人は不確実な環境下で意思決定するのであり、最適な（最適と期待される）選択肢だけが与えられるのは不安が伴う⁵⁾。人々は、環境のもつ「幅」の中で生きている。可能性のある「数」は、地域性の中で生成される個人の「環境評価」 σ の存在に起因し、選択肢のもたらす意味は各個人間で通約不可能と考えるのが現代の倫理学である。人々は、風土性⁶⁾の中で決定される個人の「幅」の中で生きている。意味のある「数」は、効用に関する経済学的論理である。センのケイパビリティはロールズの社会基本財と違って主観的な機能（厚生）を含み、効用主義的な分配的正義の観点を含む。人々は、多様な価値観をもつ個人が生活する社会の「幅」の中で生きている。

本論文では、第三の意味でのケイパビリティを考察する。ここでは効用主義的ではあるが、各人の厚生は各人が決定できるという自由を与えることによって、普遍的に通約可能とする古典的効用主義とは一線を画する。ある個人 i の意思決定モデル $M_i = (Q, X; \delta_i, \sigma_i)$ において、 r を十分大きく取るとき、現在おかれた状態（環境） $q_0 \in Q$ について集合 $X(r)$ ：

$$X(r) \equiv \{x \in Q \mid \sigma_i(\delta_i(q_0, x)) > r\} \quad (2-1)$$

が個人 i に高い厚生をもたらす選択肢の集合であって、この大きさが第三の意味でのケイパビリティである。

註1) ギブソンの「アフォーダンス」の概念も財の一つの機能ではあるが、センは財のもつ不変の特性だけではなく、主観的な機能（例えば「幸福」）まで含めている。センは功利主義を否定しながらも、幸福(well-being)と暮し向き(being well off)との混同回避、幸福という複雑な概念の理解への手助けという点で評価する([2], pp.23-24)。

註2) 従来訳語「潜在能力」は、個人に生来的に備わった能力という誤った解釈を生む可能性がある。

註3) ムーアタイプ(Moore Type)による表現で、 δ を状態遷移関数、 σ を出力関数という。

註4) 社会的な視点では選択肢の非支配性はパレート効率性ということになる。ここでの記述は個人の意思決定、すなわち個人の「生き方の幅」に着目した表現法である。

註5) 同様に交渉理論においても、縮約に関する一貫性(Contraction Consistency)というものがある。これは、実行可能な選択肢の中からある選択肢が社会的に選択されれば、その選択肢以外の選択肢が実行不可能となっても社会的選択には変化がないという公理であり、議論のある公理である(J.ローマー [3], pp.71-74), A.セン [2], pp.14-15)。

註6) 風土性とは、ある社会の、空間と自然とに対する関係(風土)のおもむき(ベルクによる定

義)である([4], p.58)。認知心理学のスキーマ論で用いる文脈効果をヒントに、別稿[5]において各個人の σ に「個人文脈」という用語を使ってそれをケイパビリティの観点から論じた。

3. 食生活に対する選好・選択と調査の実施

1) 食生活に関する選択肢とその機能性

本論文ではケイパビリティを食生活の中で考える。状態集合 Q (環境)は、食生活環境の空間であり、それを記述する軸は、栄養学的観点、娯楽的観点そして教育・文化的観点である¹⁾。身体的観点とは滋養や健康づくりとしての食であり、食生活環境空間の基本的な記述軸である。娯楽的観点とは、食事を通した楽しみとしての食であり、グルメといった狭い意味だけではなく、インドア・アウトドアにおける「喰う」行為以外の食の楽しみも包含する。教育・文化的観点とは、食行為を通した社会性(食文化の形成)、農業や環境問題への興味などである。ある個人(社会)の食生活環境は、これらの軸から構成される食生活環境空間の中で記述されるが、ある卓越の視点(またはある種の道徳的視点)による評価(順序関係)がアプリアリにこの空間に定義されているのではないことは本論文において極めて重要な点である。つまり、評価は各個人に任せるものであり、主観的な評価(個人の選好)を通してケイパビリティを測るというのがここでの立場である。選択肢は食生活環境を変える、あるいは高めるための行為である。当然ながら、高めるという意味は、各個人の責任ある選好にもとづく²⁾。

本論文では、第1表のように食生活の評価軸として9つの軸を考える。澤田([8], p.254-282)は、食生活の多様な選択肢として、1. 団欒・交流願望、2. 手づくり志向、3. エコロジズム、4. 簡便化志向を挙げているが、これらを前述の三つの観点から捉えると、1が娯楽的観点、

第1表 食生活環境の評価軸と選択肢

食生活に対する評価(選好)	食生活に関する選択肢(食の行動)
Ⅰ. 身体的観点	
①健康管理	朝食をきちんととる
Ⅱ. 娯楽的観点	
②家族との団欒	家族と食事をするように心がける
③食卓の演出	彩りや形などの盛りつけを気にかける
④コミュニケーション	食事中は会話に心がける
Ⅲ. 教育・文化的観点	
⑤マナー・礼儀作法	箸を正しくもつ
⑥感謝の気持ち	食べ物は残さないようにする
⑦家庭内での調理	家庭で調理したものを食べるようにしている
⑧生産の場とのつながり	旬や産地をよく話題にする
Ⅳ. その他	
⑨食事の簡便化(早い・安い)	食事には時間やお金をかけない

2, 3が教育・文化的観点に入る。4は該当する観点がないため、その他とする。ここではさらに、栄養学的観点を独立の観点として設け評価項目に健康管理、教育・文化的観点には、道徳的な側面からの評価項目、マナー・礼儀作法、感謝の気持ちを加える³⁾。澤田（[8], p.155）も言うように食の簡便化は食のレパートリーを拡げると言うかたちで貢献することもあるので、必ずしも食文化の衰退を示す軸として挙げているのではない。

式（2-1）を用いてケイパビリティを指標化するために、食生活の9つの評価軸それぞれに対応する具体的な食の行動（選択肢）を取り上げる。これら行動を機能（生き方）（の面から考えると、単に行動をしている（選択している）ことを機能として捉えるのではなく、ある社会が評価する（選好する）選択肢を障害なく行動（選択）していることが重要である。そこで、ある社会の評価軸*i*に関する機能性を、

〔*i*に関する機能性〕＝

$$\frac{i \text{ の評価において重要だと答え、かつ } i \text{ に関連する行動を実行している人の数}}{i \text{ の評価において重要だと答えた人の数}}$$

によって定義する。食生活におけるケイパビリティはこれらの評価軸に関する和である。

また、ある評価軸*i*における個人の機能性Func(*i*)およびケイパビリティCapは、

$$\text{Func}(i) = \begin{cases} 1 & i \text{ に対する評価} + \text{ \& } i \text{ に関する行動} + \\ 0 & i \text{ に対する評価} - \\ -1 & i \text{ に対する評価} - \text{ \& } i \text{ に関する行動} - \end{cases} \quad (3-1)$$

$$\text{Cap} = \sum_i \text{Func}(i) \quad (3-2)$$

で定義する。個人ごとの機能性とケイパビリティは、その規定要因を探る際に用いる（4節参照）。

2) 調査の設計と実施

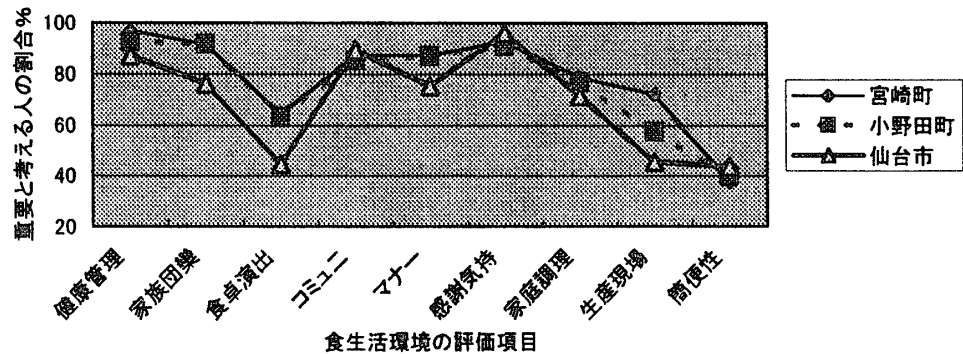
第1表の食生活環境の評価軸と選択肢に沿って、その評価軸に関する重要性（各個人の選好とみなす）と具体的な食の行動の有無について質問紙調査を行なった。調査の設計では次の三点を考慮に入れている。第一に、食に対する重要性意識や行動が明らかに高い母集団の調査から、その母集団の食生活環境におけるケイパビリティの高さを確認することによって、分析枠組の妥当性を示すこと、第二に、都市と農村でのケイパビリティの差異をみること、第三に食に関する知識（ここでは有機農業に関する知識）を中心に個人属性とケイパビリティとの関係をみることである。

調査は1999年11月8日宮城県宮崎町、7日同小野田町、14日仙台市で行なった。標本数はそれぞれ、93,108,101である。宮崎町調査は「食の文化祭」に集まった人を対象とし50歳以上は半数近く、3割が農家、小野田町調査は町主催の秋祭りに集まった人が対象で年齢はばらつき、6割が農家である。また、仙台市調査は休日のフリーマーケットで行い7-8割は30歳未満、農家は1

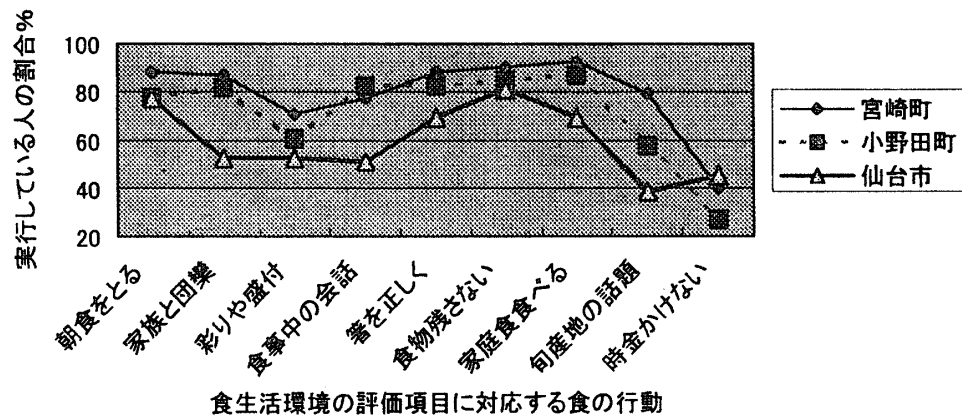
割強である。宮崎町と小野田町は隣接した町（宮城県北部の加美郡）であり、生活環境は極めて類似している。仙台市調査は市中心（西公園）で行なったが、交通アクセスからみると遠距離郊外から集まりやすい場所ではないため、殆ど都市生活住民と考えられる。

3) 調査の結果

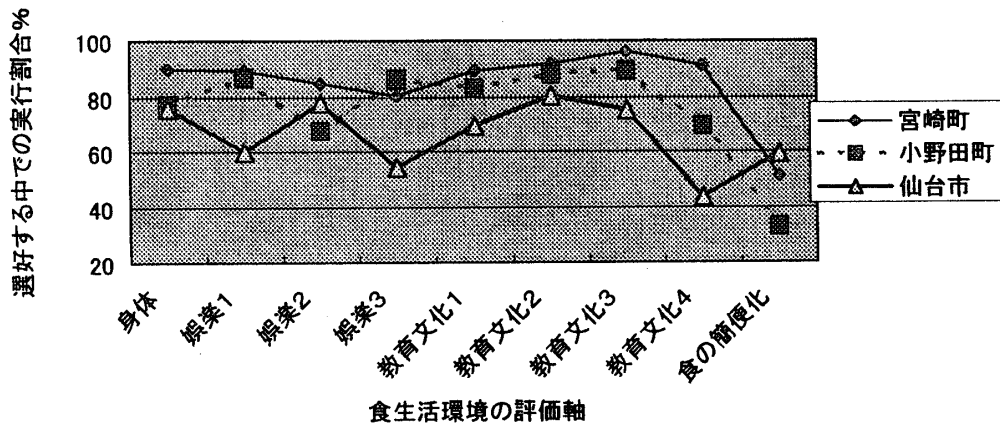
第1図と第2図は、第1表で示した9つの食生活に関する項目についてその重要性を聞いたもの、および対応する項目に関する食の行動の有無を聞いたものである。宮崎町調査と小野田町調査



第1図 食生活環境の重要度（選好）



第2図 食の行動（選択の有無）



第3図 食生活環境の機能性

では重要性意識には殆ど差異はみられないが、食の行動の実行については、宮崎町調査が 1 項目を除いて全て小野田町調査を上回っている。したがって、食生活環境の各評価軸における機能性は宮崎町調査の母集団の方が高く、食生活におけるケイパビリティ（食生活の豊かさ）も高いといえる（第3図）。これは宮崎町調査の母集団が食の文化祭参加者であったことから、極めて自然な結果であり、ケイパビリティアプローチの妥当性を示していると考えてよい。

そこで、農村部と都市部での食生活環境の豊かさの差異は、小野田町調査と仙台市調査を比較することによって可能となる。食生活に関する項目の多くは小野田町調査の方が重要性意識が高いが、それほど差があるわけではない。仙台市調査の方が重要性意識が高い項目として、コミュニケーション、感謝の気持ち、食の簡便性の3つがある。前に述べたように、食の簡便性は食生活環境空間（3つの軸）を構成する項目には加えてはいないが、新たな食生活のレパートリーを増やす可能性として必ずしも否定的評価をすべきではない。重要な点は、食の行動において、仙台市調査では小野田町調査を食の簡便性以外すべて下回っていることである。結果として食生活環境の各評価軸における機能性は、食卓の演出（娯楽的要素の中の1項目）の他は全て下回っており、食生活におけるケイパビリティ（食生活の豊かさ）は低いといえる。

以上の結果が示唆することは、都市部の食生活が貧しいのは食に対する重要性意識（選好）が低いからではなく、食生活に関する機能性に乏しくケイパビリティが低い（食の行動を実行に移せない）という社会的要因に大きく影響を受けているということである。

註1) 木村は、健康維持のための栄養補給のあり方を、人間の食生活の成立要因やその構造の中で捉える必要性を訴え（[7] の冒頭, pp.1-8）、さらに森は生活者の論理から食生活論を展開とようとする（[8], pp.6-18）。本研究で用いる食生活環境は、このような食生活論の枠組より広く考えている。つまり、食生活史にもとづく復古主義的な観点だけでなく、娯楽性や環境問題とのかかわりなど、現代的観点を含めて食生活環境の空間を記述する。

註2) 選好の責任性について一つコメントしておきたい。個人の選好に責任を課するというのは、J.エルスターの「認知的不協和」を持ち出すまでもなく微妙な問題である。R.ドゥオーキンは、本人が持ちたくない選好「渴望」を除けば、その陶冶が自発的・非自発的にかかわらず本人が自覚する選好には責任を課すべきとする[9]。しかしながら、J.ローマーは社会的背景から生じる安価な嗜好（「飼いならされた主婦」問題）には社会が補償すべきとする（[3], pp.286-287）。本論文ではこの問題には立ち入らないが、重要なことは食生活に関する選好に責任を課しているとの前提をおいていることを十分に認識しておくことである。

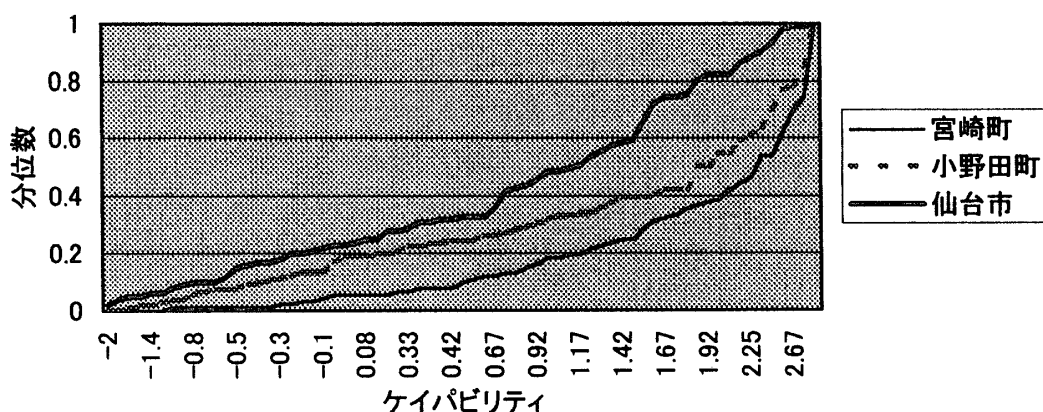
註3) 奥田[10]は、食生活を食の設計、人間関係、健康志向の3つのコンセプトで捉えている。食生活を農業や地域環境との関係性の中におくとき教育的側面は無視できないだろう。

4. 食生活にみるケイパビリティの測定

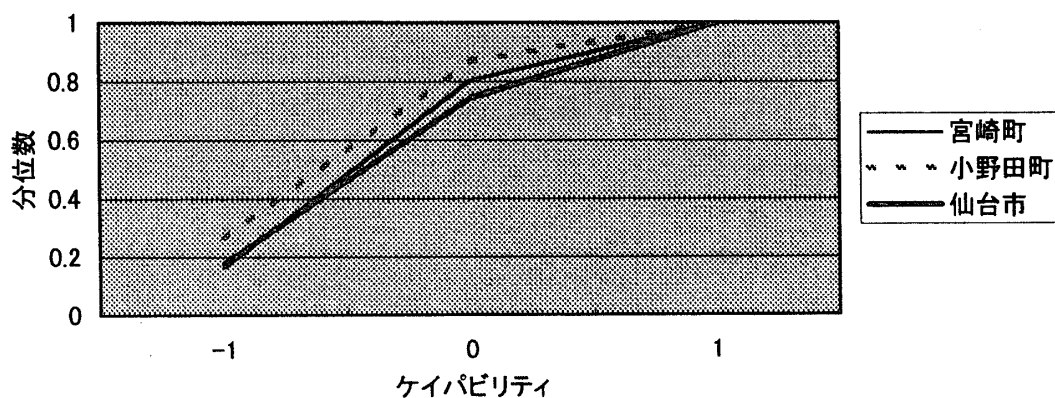
1) 都市と農村でのケイパビリティの分布

ここでは、都市と農村における被験者のケイパビリティを計算する（式（2-2））。各評価項

目に関する機能性を算出し、その和（栄養、娯楽、教育・文化の各観点における機能性の和）としてのケイパビリティを豊かさの尺度とする。また、ケイパビリティは9つの項目を単純に加えるのではなく、3つの軸に等しいウエイトをおいて加える¹⁾。したがって、食の簡便性については別に計算する。第4図は、3つの調査における食生活のケイパビリティの分布を累積分布によって表したものである²⁾。これによれば、宮崎町、小野田町、そして仙台市の間のケイパビリティの差異は一目瞭然である³⁾。第5図は、食の簡便性だけに着目してその機能性（ケイパビリティ）を見たものである。第3図からも容易に推測できるが、仙台市調査においてやや高くなっている傾向がみられる。宮崎町も小野田町と比較してやや高い。しかし、仙台市と宮崎町の食の簡便性に関する機能性の意味について一つ注意しておきたい。つまり、宮崎町の場合は、食生活のケイパビリティの高さから食の簡便性は食生活のレパートリーを拡大することに寄与しているとみなせるのに対し、仙台市の場合は食生活のケイパビリティを低めることを意味している可能性がある。



第4図 食生活のケイパビリティ（累積分布）



第5図 食の簡便性に関する機能性（累積分布）

2) 被験者属性と食生活環境に対する選好・食の行動

ここでの被験者属性は、有機農業に対する知識の有無、年齢、性別、農家かどうかの4つである。

食生活環境の評価項目に対する選好は、全体として「有機農産物を食べる」という行為と、都

第2表 食生活環境の評価項目に対する選好（重要性）の規定要因

従属変数 独立変数	食 重 要性	健康 管理	家族 団 欒	食卓 演出	コミ ュニ	マナ ー	感謝 気持	家庭 調理	生産 の場	簡便 性
有機農業につ いての知識	.019	.249 ***	.071	.016	-.020	-.043	.079	-.034	-.005	-.084
有機農産物を 食べる	.184 ***	-.046	.120 *	.073	.232 ***	.109	.164 **	.026	.098	-.047
年齢	.083	.091	.080	.030	.074	-.013	.247 ***	.104	.043	.042
性別（女）	-.183	.085	-.050	-.170 *	-.099	-.139	-.338 ***	.198 *	.081	.245 **
農家／非農家	-.172 *	.106	.129	-.144	-.172 *	-.108	-.305 ***	.187 *	.048	.248 **
宮崎 dummy	.002	.006	-.059	-.017 *	-.025	-.020	-.063	-.006	.119 *	.033
仙台 dummy	-.159 **	-.012	-.178 **	-.217 ***	.028	-.234 ***	.141 *	.018	-.167 **	.103
R ²	.087 ***	.072 ***	.063 **	.065 **	.062 **	.060 **	.127 ***	.029	.065 **	.051 *

第3表 食生活環境における食の行動の規定要因

従属変数 独立変数	食 の 行動	朝食	家族 団 欒	彩り 盛付	食事 会話	箸正 しく	残さ ない	家庭 食	旬や 産地	簡便 に
有機農業につ いての知識	.126 **	.053	.047	.081	.102	.158 **	.048	.050	.092	.003
有機農産物を 食べる	.132 **	-.034	.142 **	.180 ***	.066	-.040	-.020	.093	.066	-.063
年齢	.280 ***	.166 **	.177 **	-.027	-.001	.207 ***	.195 **	.112	.317 ***	.024
性別	.049	.042	.062	.180 *	.044	-.184 *	.061	.050	-.060	.112
農家／非農家	.084	.203 **	.074	.016	-.042	-.013	.183 *	.028	-.063	.152
宮崎 dummy	.049	.125 *	.006	.073	-.116 *	-.008	.044	-.003	.078	.181 **
仙台 dummy	-.222 ***	.172	-.259 ***	-.082	-.347 ***	-.077	.096	-.227 ***	-.086	.210 ***
R ²	.251 ***	.053 **	.165 ***	.075 ***	.109 **	.113 **	.041	.098 ***	.176 ***	.046 *

市と農村での地域による差異がみられる。評価軸ごとにみれば、栄養学的観点と有機農業についての知識、娯楽的観点と「有機農産物を食べる」および地域性、教育・文化的観点と年齢、性別、農家および地域との関連が深い（第2表）。また、食の簡便性については性別と農家との関連がみられる。都市部では農村部と比較して、食をコミュニケーション以外の娯楽として選好しない傾向があり、農業環境とも疎遠な感覚をもっていることが伺える。また、感謝の気持ちが女性と農家で低いのは、自ら食生活に深く関わってことに関係すると考えられる⁴⁾。また、食の簡便化への選好が農家や女性層に高いことは、日本の農業の衰退および女性の社会への開放に強く影響されているであろう。

実際の食の行動は、一般に選好よりも強く属性に規定されている。有機農業に対する知識や行動は勿論、年齢や地域差も大きい。栄養学的観点からの行動（朝食をとる）は、年齢と農家に関連がみられ、娯楽的観点からの行動では、「有機農産物を食べる」、年齢、そして農村部との関連がみられる（第3表）。教育・文化的観点からの行動では、年齢と農村部との関連が大きい。また食を簡便化する行動は都市部で多いが、前に述べたように、宮崎町での簡便化行動は他の食の行動とを考え合わせると意味は大きく異なる。すなわち、仙台市では、食の簡便化行動が他の食の行動が生んでいる傾向はみられない。

3) 地域性・食の知識とケイパビリティ

食生活環境の各評価項目に対する選好や行動が都市部において低くなっていることは、直接、食生活の豊かさを損なっていることを意味しない。各評価項目の機能性およびケイパビリティの規定

第4表 食生活のケイパビリティと各機能の規定要因

従属変数 独立変数	CAP	栄養	娯楽 1	娯楽 2	娯楽 3	教文 1	教文 2	教文 3	教文 4	簡便 機能
有機農業についての知識	.034	-.051	.080 *	-.005	.101	.136 **	.038	-.021	.042	.085
有機農産物を食べる	.135 **	.053	.077	.171 **	.070	.028	.007	.137 **	.116 *	-.096
年齢	.224 ***	.195 **	.123	.015	-.015	.097	.202 **	.054	.209 ***	.055
性別	.113	.088	.027	.164 *	.129	-.089	-.047	.174 *	-.067	.064
農家／非農家	.211 **	.213 **	.042	.114	.037	.081	.073	.144	.001	.085
宮崎 dummy	.138 *	.154 **	-.009	.156 **	-.095	.014	.035	.034	.167 **	.129 *
仙台 dummy	-.120 *	.079	-.266 ***	.002	-.296 ***	-.138 *	.075	-.185 *	-.108	.245 ***
R^2	.180 ***	.072 ***	.132 ***	.057 **	.086 ***	.080 ***	.035	.076 ***	.160 ***	.048 *

要因を示したのが第4表である。これをみると、ケイパビリティは有機農産物との接点、年齢、農家、および地域による差異がみられる。有機農産物は娯楽性や教育・文化的観点での機能性に寄与し、年齢は栄養学的観点と教育・文化的観点での機能性、そして農家は栄養学的観点での機能性に寄与する。最後の2つは社会的要因が大きいものと思われる⁵⁾。

都市部で食の豊かさが損なわれているのは娯楽的観点での機能性であり、特に都市社会生活での経済活動によって、食を媒介としたコミュニケーションが制限されている現実が伺える。

註1) 栄養学的観点、娯楽的観点、教育・文化的観点における各評価項目には、それぞれ1, 1/3, 1/4のウエイトをおく。また、定義式から簡単に確かめられるが、各個人のケイパビリティを3つの調査ごとに集計したものは、第3図における各項目の割合を同様なウエイトで加重集計したものと実質的に同じである(アフィン変換を通して同値)。

註2) 定義からケイパビリティは-3から3での値をとる。ケイパビリティが0というのは、重要視する観点に関係する行動の有無が半々という意味であり、重要視しない観点は無視されている。

註3) ケイパビリティの平均値は、宮崎町、小野田町、仙台市でそれぞれ、2.03, 1.56, 0.91であり、小野田町と仙台市の事後比較において有意水準1%で有意差が認められる。食の簡便性に関する機能性の平均値はそれぞれ0.03, -0.13, 0.08であり、小野田町と宮崎町および仙台市との間で有意水準5%で有意差が認められる。

註4) 1981年のNHK放送世論研究所の調査によれば、食事時のあいさつを必ずいう者は大都市部で47%、町村で37%である([11], p.78)。

註5) 高年齢になると、健康面や文化面での行動のための時間的余裕が生まれ、また、農家の人は生活時間の関係から朝食をとりやすいと考えられる。

5. 結論と提言

最近、都市化の進展によって「食」と「農」の距離が大きくなってきていることを危惧する声がよく聞かれる。それは、「食」の外部化・サービス化や簡便化を求める消費者の意識や行動から食生活への関心を低下させるからという心配である。本論文では、経済学的観点からではなく倫理的観点から食生活の豊かさを測る尺度(ケイパビリティ)を提示し、「食」と「農」の距離の大きさ、すなわち都市部での食生活の豊かさが損なわれている現状を計量的に示した。ケイパビリティは、その定義上食生活への関心の低さと無関係ではないが、食への関心を高めようといったお節介な論理は含まれていないことに注意することは肝要である。分配的正義におけるA.センの構想が倫理的に正当なものと合意できるならば、そのとき初めて都市部の食生活の貧困さが忌忌しき問題として浮上する。

年齢とケイパビリティの関係性から、ケイパビリティが時間的なゆとりに強く規定されていることは明らかである。有機農業への関心も教育・文化的観点における機能性と深い関係にあり、有機農業は農業と環境に対する意識を喚起する牽引になろう。また、女性による食の簡便化志向とそ

の実践（機能性）は、これまで家庭に押し込められていた女性の社会への開放として歓迎すべきことではあるが、食生活のケイパビリティの観点から豊かさを考えるならば、新たな食の意識とその食行動を積極的に生み出す工夫をする必要があろう。

引用文献

- [1] 川本隆史『自由と社会との二重のかかわり—A.セン『自由と経済開発』のレビュー』日本経済研究センター会報, 2000
- [2] A.Sen, “Commodities and Capability”, North Holland, 1985
- [3] J.E.ローマー（木谷忍, 川本隆史訳）『分配的正義の理論—経済学と倫理学の対話』木鐸, 2001
- [4] オギユスタン・ベルク（三宅京子訳）『風土としての地球』筑摩書房, 1994
- [5] 木谷忍『農村環境との共生—生活の幅に着目した環境の倫理的評価に関する研究—』日本環境共生学会2001年度学術大会発表論文集, 2001
- [6] 木村修一 [ほか] 著（栄養学・食品学・健康教育研究会編）『食生活論』同文書院, 1987
- [7] 森雅央『食生活論—食えることへの私論』三共出版, 1987
- [8] 澤田壽々太郎編『たべることの, いま—食生活を視る—』嵯峨野書院, 1993
- [9] R. Dworkin, “What is equality? Part 1 :Equality of welfare”, *Philosophy & Public Affairs* 10, pp.185–246, 1981
- [10] 奥田和子『現代食生活論』講談社サイエンティフィク, 1989
- [11] NHK放送世論調査所編『日本人の食生活』日本放送協会, 1983